岐阜林友

大正三年九月二十五日　第五拾九號　（毎月廿五日刊行）　（明治四十三年七月十日第二種郵便物認可）

目次

▲學術
下高井の杉林に就て
奥羽北部に於ける想思樹に就て

▲紀行
白馬登山思出の記
駒ヶ岳登山の記

▲通信
禮程一千日
山林學校便り
校友會便り
校友消息

▲文苑
趣味の道
煙草　歌
演習林の歌

▲雜報
片々

學術

下高井郡の杉林に就て（承前）

北村正夫

斯樣な沿革によつて成立した同地方の杉林は現今如何なる造林法を行ふて居るか其大要を述べよう

苗木は地方の山林から種子を採取し又は秋田地方から種子を求めて播種して養成するものもあるが播種苗圃は保護手入が面倒で費用も多くかゝるから通常は苗木商から二年生の苗木を求め之を苗圃へ床替して（床替の間隔は八寸乃至一尺とす）更に二年間養成し滿四年生になつた大苗を山出用とする、

杉山出苗は二回床替をした滿三年生で一尺五寸内外位のものを用ゆるが普通であるが當地方では平穩村の一部を除ては前記の如く三回床替した滿四年生の丈夫な大苗を用ふるのである之れは昔時よりの仕來りで其の理由は雪害と雜草の害を防ぐ爲である

造林する土地は便利と地味の二點によりて撰定し杉林又は雜本の伐採跡地を用ゆるが杉林の跡地よりも雜木林の跡地の方が手入には困難であるが造林後の生育は良好であると云ふことである

山地に植付をなすには當地では間伐材を利用することがなく自然伐期も早く（三四十年生位）且つ又雪害の多き關係から一般に大苗を疎植して居る場所に依つて多少の差ひはあるが普通は七尺乃至九尺の間隔に植へて居る

夫れ故森林の鬱閉することが遲く雜草の害と下枝を生することが多い爲下荒の刈拂ひと枝打とは他の地方の民有林に於て多く例を見ざる程周到に行はれて居る。即ち雜草木の多い所では植付後二三年間は毎年一回宛下刈を行つて居る又枝打は通常十年生前後から三四年毎に繰り返し以て樹幹の梢殺と大節の生ずるを防いで居る。尤も日野村では早く大きくして早く伐採の出來る樣にする爲即ち肥大生長を速かならしむる爲に全く枝打をせぬものが多い相である此等の杉林では材積生長量は多いが幹の形質が不良である爲一尺〆に付て五十錢乃至一圓廉價であるといふことである

伐期は各所有生の具合に依つて一樣でない中には二十五年生位で皆伐するものもあり又五十年位迄も置くものもある然し大低は三十年から四十年迄に皆伐せられる夫れ故此の廣大なる森林の内五十年附上の林は

甚だ稀である

杉林の經濟……此等の杉林は場合に依つて地味の良否、運搬の便否、造林手入の適否等の差ひがあつて其經濟狀態も一樣でないが今平穩村で中等地味の所に就いて調査したものを示せは次の通りである

杉林一町歩の損益計算

但し中等地位にて伐期を四十年とす

林地價　百圓　造林費一切　百〇三圓

管理費　毎年一圓宛伐期收入　二千〇八十圓

此收支によつて林地期望價及平均周利率を計算すれば

但し年利率を五分として算す

$$\text{林地期望價}(Be)=\frac{Au-e_{1,0Pu}}{1.0Pu-1}-V$$

$$=\frac{2080-103,\times 1,05^{40}}{1,0540-1}-1\cdot\frac{}{0,05}$$

$$=\{2080-103,\times 7,0400\}\times 0,1656-20$$

$$\times 204,388$$

依之視是れは林地の賣買價百圓に比し百〇四圓餘の利益となる理である

$$\text{平均周利率}\ (P')=\frac{Be+V+Cu}{B+V+Cu}$$

$$=\frac{204+20+120}{(100+20+120)}\times 0,05=0,072(-)$$

依之見れば放下した資本の實際の利廻りは七分二厘弱となる之を資本利率年五分に比較すると二分二厘の利益となることとなる即ち林業資本に對して二分二厘に相當する企業利益を得るのである

臺灣北部に於ける樹に就て の想思

（承前）

大脇又衛

第十章　結論

爰に想思樹の生長量査定及收穫表調製に付略其概況を記せり今本論を終らんとするに當り尙一言を述べんとす

本調査は本島にありては其前例少なく爲に參考據るべきものなく殊に今回の調査は其材料僅少日次短期なるの關係と然も臨時撰定の標準地に於て只一回の測定をなせるのみなれば完全以て推究するの不可なるは言を俟たず

而して之を高さの生長により地位三等に區分せりと雖も不法正なる林地の林木本數及直徑等は決して之に伴はず從て材積にも大差を生じ却つて反對の現象を示せるものなしとせず斯く殆んど據るべき途なき不規則なる實測の結果に基き曲線を以てせんとするも其向ふ所に迷ふの感なき能はず

要するに今回の調査を以て完成せりとは云ひ難く之に關する研究の餘地又充分なれば後日好材料を得ば益其歩を集めて調査せんとす然れども現今の狀態に於ては到底之が滿足を求むべき林地なきを如何にせん今や林業發展の時機にあたりて聊か造林又は經理上其補足になすを得ば感謝する處なり

尙一言すべきは輪伐期の決定問題也、蓋し伐期は林業家の最も熟考を要すべき事項にして之が當否は事業の收益に甚大なる關係を有するは贅言を要せず、蓋し林木の成長は元金より生ずる利子に相當するもの（自家の考也）なれば重利の法則に從ひ年々其額を增大すと雖も最高の時期を經過すれば漸次下降するものなり然れども亦種々の關係より其否らざる場合あり故に林學上に於ても伐期と區分して五種とせるは右に基因するものならん？即ち自然的伐期工藝的伐期木材產額最多の伐期林利最高の伐期及財政的伐期是なり（各個の說明は諸兄の知る處故に之を省略す）

而して本島に於ては未だ施業案に據れる森林なり法正林の存せざる殊に想思樹の如きに就て其輪伐期の急攻するの愚を學ぶの必要なしと雖も一般の伐採すべき時期は經濟上何年位を適當とするやを知るは蓋し無用のことにあらざるを信ず

尤も從來本島にありては需用の都度容數なく伐採し來れるも亦一般的より觀察する時は普通想思樹は七八年後は十四五年（特別の用運のものを除く）に伐採するが如く萠芽林は四五年より遲くも七八年にて伐採する如し

然らば果して何年位が好適伐期なりやの問題は容易に決すべきにあらざるも普通經濟的經營の森林にありては最後に擧げたる財政的伐期を以つて適當なるものならん（之れに關する說明省略）然れども本島人の如く粗放的林

業殊に想思樹の如き何れにしても壽命短く只薪炭材とするを良眼とするのみならず加ふるに土地資本勞働等の觀念に乏しく造林手入費又は管理費及貢粗資本等判明せざる時に當り必ずしも財政的伐期によるの要なく寧ろ單純に林木生長の最高に達し之より遞降せんとするの時を伐期と定め其伐積も連年平均の生長力最高に達せんとし又は達して相交るの時を以て伐採するを適者と認む故に左の如くせば可ならん

普通植栽林　十三―十四年

萠芽林　七―八年

を以て伐出す尙薪林は老年迄殘存するときは取扱及品質上不利なるべし

以上にて本稿を擱筆せんとす其言ふ所の拙なる調査の不完全なる呑舟の魚を失したる點少なしとせず之れ韭才淺學の致す所幸に指示敎訓を吝さるの人士あちば就て後日の研究調査の資と爲さん乞ふ敎を垂れよ謹言

附　臺灣松に就て

本調査を茲に表明する筈なりしも都合上暫く見合せ後日を期して本稿の續編として掲載せんとす都合とは他なし公務長期出張の餘義なくせられたればなり故に申譯的に茲に其概略を記して謝辞に代不諒せよ

臺灣松は（Pinus Massoniana Lomb）にして方言之を松柏と云ふ本島熱帶圍內の平地附近に多く殖生する唯一の針葉樹にして想思樹の其の如く又何れの地にも適するものなれども分布區域狹小にして北部臺灣の一局部に存するにすぎず

故に其利用の途開けざるを以て未だ洽く認介せられざれば價格亦低廉なりと雖も將來土工用材建築用材として利用せらるゝに至らば自然其價値を認めらるゝに到るは言を俟たず目下北部にて運搬の便ある地方には盛に奬勵撫育をなし之が造林の好評を來せるは喜ぶべき現象なり

尙本樹種に就ては兼て母校に送付しある臺灣林木證松柏科の記事並に標本を參照し傍ら臺灣の林地を繙かれよ彼れは明瞭なる記載を諸君に與ふべし

茲に本稿を終るに當り謹んで校友各位の生榮を賜りたることを謝すると共に其足らざるを補はれんことを切望す尙本稿並に本嶋林木に對し御用あらば左記へ命せられよ其知らざるは尋ね以て御質問に對へんとす

四十七番地　大脇又衛宛

附　今日は午後二時百二十三度に有之候

（六月五日稿）

紀行

白馬登山思出の記

珍竹山人

一、登山計畫

吾々林業家が唯一の武器は親ゆづりの身体中何であろうか曰く脚である山林の經營指導は勿論自己の造林地或は監督地を見廻るも脚の御蔭である如何に文明の利器殊に交通の機關が完備しても日本の地勢では日本の林業を司配する我黨の士はどうあつても健脚でなくては駄目である假令草鞋と云ふ世界一の輕裝でも之を穿つ脚の健否は直に其人の苦樂に影響して來るうこで林業家の健脚養成の必要などを說くは寧ろ野蠻の話である然し往々健脚登山向の資格なくして林業家たらんとする者がある實に嘆す可きの至りである

然し健脚にも亦自ら差別がある種類がある吾々林業家には登山向健脚であることが必要である即ち持久力の强いことが肝要である之は最も高山の登山に依りて修養が出來る高山登山の利益は獨り此健脚養成のみでない第一身神全部の發達向上に益するもので高山の神靈自然の景觀に接して所謂浩然の氣を養ふ事が出來るのである

關西方面に永く生育した自分には僅か二三千尺の山が高山の樣な氣がして日曜日位に日歸りの登山でも愉快であつた然るに我木曾の天地に生活しては日常の住居する所が海拔二千七百尺餘である恐らく我日本帝國中中等學校以上の程度にあち校舍では我木曾山林學校が一番最高の地點に建設せられて居るであろうと思ふ然かも朝に駒ケ岳の

三十六峯八千谿を眺め夕に御嶽の偉大なる山容に接し氣宇自ら崇高にして何となく脱俗の念に充つるのである

かくて我山林學校の御嶽駒ケ岳二峯の登山旅行は毎夏仲てらるゝのである實に修學旅行として唯一の目的地である寶庫である自分も二度宛登つて居る然して此二峯より遙かに信越國境の北方に聳ゆる白馬嶽を遠望して懷みが生ずるのである否空中飛行の自由がきけば日本北アルプスの重鎮として世間に評判の白馬嶽迄飛行して見たいと云ふ希望が湧出する然し高山より高山の頂上を見透せば直線距離は近くても實際如何なる難脚を以ても普通の順路を迂回すれば容易でない卽ち木曾福嶋よりは明科驛迄汽車に便り次で十二里の車馬道あり更に四谷より徒歩四里餘の坂道を登るのである

今日飛行機飛行船は專ら軍事上の重要物であるやれ巴里の市街を襲ふたとか膠州灣を擊つたとかで御互に熱狂する時代であるが將來に於て現時の自轉車利用程度迄飛行機の應用が進んで來る時代となれば登山者の利便は計り知る可らずである然し之と同時に往々危險事故の生ずることは免れられまいと思ふ眞の安全と愉快は健脚登山に若かないのである

信州は日本の高山國である日本アルプスの名を冠せて歐州アルプスの兄弟分となつて居るから我信州の高山登山家には唯一の目的地である之等の先覺者が聲を大にした殊に英人宣教師ウエストン氏が日本アルプスの命名をしたと云ふこと其他山崎博士の氷河說の誕生地として又植物學上シロウマの山名を附した高山植物が尠からぬ事と其他山形雪帶の遠望に依り一層世人の好奇心を挑發して居る處の白馬岳は近年に至り探險登山の域を脫して修學旅行地として好箇の目的地に化せんとする樣になつた卽ち本年八月の如きは東京高等師範附屬中學の生徒職員が三十人の團隊で登山した事などは顯著なる出來事である東都の生優しき書生だと云つて侮る事は出來ない學術的に趣味豐なる學生社會には誠に東京の大博物館より價値あるものとして熱心に研究調査しつゝあるのである

時に本年七月突然信濃毎日新聞紙上にて我長野縣林務課の主催にて白馬登山の計畫を立てられたのを承知した然かも其目的が林業思想の皷吹並に開發にあるといふを以て何狀默すべき直に自分は一行に加はることをイノ一番に申込んだのである所が林務課でも自分が此一行に加はると云ふので大に贊成せられ新聞紙上に前以て吹聽されて居た誠に結構なことだと自分にも勇み立ちて豫定の七月二十九日なる出發日を待ち尙ほ宮川敎諭も高山植物狂であるし白馬嶽登山を希望して居られたから同行する豫定であつた自分は去明治四十四年の夏七月下旬信濃毎日新聞主催で下高井郡平穩村なる岩菅山海拔(八千尺)登山を試みた時林務課から派出せられ同行した時計らずも頂上の三角點臺に上つて一行數十名を眼下に山上演說をやつたのが『岩菅登山と林業觀』であつた此時の氣分は自分ながら自分の本心とは思へない、天地自然の命令の如き感がするのであつたかゝる境遇は容易に得られない期せずして得られたのであるが今度は當時を追想して再度の機會を與へられたかの如くに心中窃に覺悟して居たのである

然るに幸か不幸か此最初の計畫希望は駄目になつたのであるそれは當時雨天連日風雲穩ならず俗に地方の人士は『降ハッセン』であるからまだ數日間降り止まないと云ふのである愈廿九日出發の期凡ての用意は出來て居た早や同行の宮川氏は來訪せられて出發如何と押しかけられた先日來の希望に滿ちた自分の脚は踊つて居た然し茲に一陣の暴風雨襲來それは山の神の祟りである、天候不穩の出發日和を苦にして無理に危險を冒す必要がないではないか天候恢復を待ち休暇中いくらでも安全日を期するがよいと雷鳴一擊のもとにこれも理なりと同行の宮川氏先づ鋒を鈍らしたので自分も家族の平和を害し心配して不愉快の登山を好まず何事も愉快に事をなすの主義殊に高山旅行の際山の神樣大事御尤もと恐縮致したが一の

理由、今一つは翌三十日には恩師の佐々木理學博士が豫て我校舍に滯在して木曾昆虫の採集をなす爲め來着せらるゝ通報に接した爲め恩師の折角の來福に自分が不在では師弟の道にあらず往年高雄山に昆虫採集に指導を受けた御恩返しは此時なりと考へ若し今出發せば不在中である而も博士の我校舍滯在は未曾有の珍事である本校の名譽である否我長野縣敎育界の誇りであると信じ老博士の元氣と博識に接し十年一昔前の弟子奉公否今度は地理丈は木曾の天地を案內する大役だと信ト遂に〳〵白馬行中止の大決心をしたのが第二の理由である

かくて白馬行の第一計畫は頓挫したが一方佐々木博士を案內して一行七人八月一日駒嶽に登山し二日歸校獲物澤山一同紀念の撮影をなした然かも我校の玄關前に於て佐々木博士を中心に三宅博士農夫助手の三橋山田兩君其他千野諏訪高等女學校敎諭松原小學校長之に自分と本校敎諭宮川大塲の兩君併せて九名である駒嶽登山隊一行の勇氣と元氣と然かも採取物に付各自の誇り顏があらはれて居たのである、我山林學校が將來益發展して博士の二名も居付くことがあるであらう又うならなくてはならぬと云ふ光明を認めたのである實に樂しき前兆ではないか我舍生の中よりも今度博士二人迄宿泊せられたと云ふからには今の舍生連中からも未來の博士が輩出するであろう又輩出し樣と云ふ聲をほのかに聞いた之は自分の樣な敏博士でなくて眞に檜博士花柏博士楡博士明檜博士高野槇博士が出て木曾五木の名と共に世界の林學界を壓倒したいものである

本年の夏は誠に不思議な緣だ先には札幌農大の新島博士が學生を連れて來られて木曾の昆虫を採集し我山林學校にて休息し尙敎材を持歸られた都合日本で著名の昆蟲學博士三名が御來校に相成つた次第である此頃或人の便りに來年の夏は札幌より松村博士が御入來の樣子いやはや木曾の昆蟲も日本的になつたから喜んで居るだらう尤も一度採收網にかゝつた虫は最後であるが大學の博物標本室に彼が墓場を求めることが出來たとすれば結構な話である今に歐州の戰亂が治まつたら英佛露獨等の諸列强國否學者國から相踵で昆虫網を携へて木曾の關所に乘込み給ふ時代が來るに違ひない我大正の時代に於ける木曾の御關所守はなか〳〵骨の折れることであろう又同時に愉快な事であらう

今年の夏は余程福島へも大學生が避暑の名義で乘込んだがそれは大抵法科醫科の學生で書物の上の勉强許りとか承つたが或方面に於て殊に木曾の天地は實に博士の樂園學府である此點に於て木曾の眞味を味ひ又之を活用し學界の爲め貢獻するの士は進んで我地に遊學すべしである敢てかの木曾觀光團の如きハイカラ紳士を迎ふるの暇なしかく天然が與へたる富豐なる學界の獲物は吾人の四圍に充滿せり之を獲得すべく努力せねばならぬ而して幸ある吾等が四圍の自然に接觸すべく健脚と注意力とを益々强固ならしめんことを希望す

林務課主催の白馬行は當時信濃毎日新聞紙上に原河東氏の雄筆をふるはれたるあり後人其行を共にせざりしを歎じたりしが後に至り其一行登山の當日(七月三十一日)は雲霧强く到底遠望の屆く天候でなくして只一間先は霧の海と云ふ有樣にて快樂とか學術的研究とかは得兼ねたと云ふ話であつたが流石新聞記者の天職として其當時の登山記が多方面に涉り且つ讀者をして悲壯快感千万無量の感を起さしむる記事を連載せられたのを感謝すると同時に自分は前述の理由に依り一行に加はることを中止(電報にて通知せり)せるは却て福であつたと今より佐々木博士の延着と山の神の注意制止とを感謝するのであるかくて八月九日天氣快晴の雨摸樣を見定め孤軍奮鬪白馬の嶮を越ゆる第二の計畫を豫定の如く實行して豫期以上の收穫物ありたるを喜ぶ依て讀者諸君に分配仕り度く御報告致すのであるが將來の拙なき筆を戰爭熱に冒されたる爲め聊か思出の浮び申さぬまゝ豫め御斷致して置きます

駒ケ嶽に登る記

宮川丑作

予が性旅行を好み殊に登山を愛す、休暇中は金さへあれば家に居たる事なし、御嶽・駒ケ嶽は云ふに及ばず、赤石に荒川に、淺間に白根に、八ケ嶽に惠那に、黒姫に戸隱に、信の山河は白馬の連峰を除く外概ね跋渉せり、精神の修養にも非ず身体の鍛錬にも非ず、將た又智識の收得にも非ず、唯だ出て歩るき度く欲するのみ。

今夏偶々農科大學より佐々木・三宅兩博士一行の昆虫研究の爲め來蘇せられ、我山林校に寄宿せらるゝあり、學者の聲咳に接するを樂みとする予は此機會を待ちつゝありしに、滯在中駒ケ嶽登山の事あるを聞き從ひて再び其頂上を極めたり、一行は佐々木博士及同大學の山田先生、諏訪高女の千野教諭、大桑小學の松原校長、夫れに我校の安藤校長大塲教諭、之れに予及人夫二名を加へ總勢九名、三宅博士及三橋先生は微恙の故を以て加はられざりしは遺憾なりき。

八月一日、晴、一行は朝六時少し前福嶋發の滊車に投じて上ケ松に下車、直に歩を進めて登山口に岐れ、裾野なる德原を過き滑川を渉り、麓なる敬神瀧の邊に休憩暫し活を入る、時に午前九時少し前にて上ケ松より里余也。

夫れより連峰の前衛たる里人がマルツムジと稱する急峻胸を衝く如き喬木帶を昇ること里許にして五合目鐘掛の小屋に著き用意の辨當を物す、時に十一時半頃也、茲にて予は珍品ビランヨを採集す、小屋の主人其何品たるを知らざるも、美しさの余り附近より採り來りて其傍に植ゑ置けるものを、了等の人夫は夫れとも知らで取り來りて美しき花ありと云ふ、主人そは斯々なりと言はせも敢へず早く既に予の胴亂に入りたるも、同人之を失敬採集と云ふ、予衷心忸怩たるものありしも忍びて主人の氣配を窺ひ其儘にす。

軈て出立、喬木帶中由なす花崗岩に苦むす間をたどり進む、五合目より六合目七合目にかけ岩窟若くは老木の空などに光蘚いと多し、行く事更に里許午後一時頃八合目なる遠見塲に著漸くにして喬木帶を脱せり、裾野は短かけれど喬木帶の長く且急にして坂路に時を費すこと多きは他の山にて殆んど見ざる所也、麓より四時間以上を費せり。

茲より次第に灌木帶に入り、路は前岳の右方側面急斜せる所を横過するものにして、高山植物の盛に開花せるを觀る、九合目附近に至れば絶頂、寶劔岳等眠前に現はれ見るからに壯觀なり。

午後三時頃までに一行壺く前嶽と主峯との間なる玉の窪に着し其處の小屋に宿る、元氣旺盛なり、殊に佐々木博士の鑛鑠たる、常に吾人壯者を凌ぎて先頭し毫も倦德のさま見ねず、小屋に著するや親ら先づ大先達佐々木忠次郎と達筆し宿泊帳を賑はせり、博士がアルコールやニコチンを嗜好せらるゝは、其身體の健康を指示するバロメートルにやあらん、予は一休の後高山植物園に移植す可き高山の精をあさり、或は靈鳥を追ひ廻はしなどして小屋に歸りし頃は、既に一行が晩餐に舌鼓を鳴らしつゝある頃なりき。

今宵空よく晴れ渡りて星料霄漢に欄干たるに、上弦の月亦さえて天の戸を渡り、一トト度び歩を屋外に轉ぜんか、身は星界に沒入して我獨り虚皇たるの感あり。

爐火にまとひて太古の面影を忍び、軈て華胥の國に遊ぶ。

八月二日、晴、既に月夜の光景を觀たり、又日出の大觀に接せんと早起絶頂に登る、東方は稍々曇りて明かに日出を見る能はざりしも、五色の雨の美しく棚引けるあり、東南は遙か富嶽の手前に赤石連峯の天を摩するあり、西北には御嶽の雄姿を始め飛彈山脈の髣髴たるあり、淺間は見ねざりしも八ケ嶽は指呼の間にあり、壯觀言語に絶せり。

名殘を惜みて小屋に歸り午前六時半頃出立小屋より直に細徑を求めて降り、或は道を失し或は叢中を分けて危き崖を横切りなどし、時に安藤校長は用意の便利鎖を以て荊棘を伐り枝椏を拂ひ、英雄と水との如く自

から進路を開き、辛うして山姥の寢床と稱する大岩窟に出で一ト息す、此間諸先生は谷間の傾斜地なる小御花畑に舞ひ戯れる珍しき蝶殊にクモマベニヒカゲなど採集し喜ばれたり。

再び歩を起して前岳駒石方面より來る途に合し、又喬木帶の急斜地を降りオサバ草など採集しつゝカウの川に出で晝飯せり、時に十一時頃也、夫れより頓がてカウの川の原に出で、更に趣味なき大原をも過ぎて木曾街道に合し、七笑橋頭の茶亭に嫗媼を驚かし、上田にて木曾川を渡りて對岸に遷り、午後三時歸校、校庭にて記念の撮影をなし、一行の無事を祝して解散せり。

(附記)

駒岳は木曾と伊那との境に聳ゆる木曾山系の主峰にして、高さ一万尺(約九千六百尺)を出でずと雖、所謂三十六峰八千谿にして峯多く谿深く、加ふるに登山者多からざれば、登路粗惡に休泊の設備亦完からず、御岳の俗化せるに比し登山者をして「荒廢せる駒ケ岳」を叫ばしむる程なるを以て、一ト度濃霧に際し風雨に會せんか、往々にして不測の災厄に陷ることあり、今回は幸好箇の日和なりしを以て、何等不便困難に遭遇せざりしも、侮る可からざるものなり、蓋し登山の成否は一に以て天候の如何に存するものと謂ふ可きなり。

木岳は地質上深成岩に屬するを以て全山盛く花崗岩より成り、鑛物學上多くの研究資料を有せざるも、里人が御岳を『死に山』駒岳を『生き山』と稱する如く、全山生氣に滿ち、山麓より八合目附近に至る迄、喬木繁茂して森林帶を成し、晝尚暗く、頂上に至る迄植物盛に生育し、陰濕の地に適する光蘚を始めオサバ草に至る迄、植物の種類分量極めて豐富なり、山陽が『山、水を得ざれば生動せず。石、水を得ざれば蒼潤ならず』と云へる眞景は本岳に於て始めて之を見るを得べき也。動物の如き亦植物と密接の關係を有するを以て、植物に豐富なる本岳には亦諸種の昆蟲など生育せる者の如く、稀品『雲間紅日陰蝶』の如き數多産せり、要之本岳は博物調査研究上得易からざる山岳ならんか。

本岳を或は中央日本アルプスと稱するものあり、或は中央アルプスと稱す可く南北の夫れに比して物足らずとなし否定するものありと雖も、吾人はアルプスなる名稱を我邦の總ての山嶽より取り除かんと欲するものなり。

通信

警程壹千日

(七)

曾山子

◎凉風身邊を拔ひ瀨々たる水災の報耳朶を敲く、蓋し一雨毎に吾等林業家の責任層一層重と大とを感せずんばあらず、而して吾等は這般の災厄を轉ト て幾十百倍なる福利の素因たらしむるの覺悟を要す

◎時代の移推は遂に恩師松田先生の隱退を余儀なからしむ、先生の温情慈父に比すべく其德は四隣を懷從せしむ、我徒在校中の動作は特に恩師を惱ませし事多き丈け爾來先生の仁德を仰慕する事一層厚く、近く信山に勤務さるゝを欣びたり、然るに今や遠く山川數百里を隔絶するの時期は來れるなり嗚呼、希くは恩師松田先生益々御勇健ならんことを

◎北村先生の稿下高井郡杉林調査記面白く拜見す、第一回は普く人口に膾炙せる美談の一頁なり、以下稿に從つて佳趣津々たらん、信州の天地亦材質秋田杉の上位にある=磨き丸太として又好望なるべき=鬼無里杉、北安曇北部の良杉等あり就て御調査と御指導とを俟つ、

◎世界的大戰亂より見だる林業家の位置として興味ある一事を發見せずや、曰く、世界の和亂を頸の搖ぎ方によりて左右せしむる猶太人(鄉國を有せざる)の世界の各地に別に一勢力を保持して存在するは何を語るか富豪と賞せられ世界の資本國たる英佛の逡柔なるは何を意味する乎、而して天賦の恩惠鮮き獨逸の勇斷と猛進とは以て何物を吾徒に警告する乎ツアイキンデルシステムを以て公然の風習とせる佛國ランダーチス

を以て表示せらるゝ英國の憂色あるに際し譬へ結果の逆睹し得らるゝにせよガイアントを以て表示する獨逸の優勢猛勇なるは茲に所謂大なる教訓を吾人の上に垂るゝにあらずやユーゼニックスの上に！吾人の今日に於て外野の活動に見て！呵々

（九月十日野澤温泉にて）

學校便り

◎大詔煥發と訓話、事局の切迫は遂に八月廿三日午後六時の大詔煥發となれり我校に於ては翌廿四日早朝職員生徒一同講堂に參集し校長はいとも嚴肅の態度を以て音吐朗々大詔を捧讀し終つて戰時心得方に關し校長に懇篤なる訓話を爲せり

◎軍隊送迎。我が中央線は八月下旬頃より既に軍隊の輸送を開始し居りしが九月に入りて續々大部隊の輸送を見る事となりしを以て九月五日午前九時我校職員生徒一同は停車場へ參集、同時刻通過の某聯隊七百名の貔貅を送迎せるが我等が一齊に浴せかけし萬歳に對へて彼等も亦萬歳を連呼して之に酬ひたる悲壯の光景は吾人をして坐ろに彼の風蕭々易水寒の感を起さしめぬ宜なり送迎者中感極つて涙漣然たるものありしこと其後數回に渉り軍隊の通過ありしか其都度安藤校長を始めとして職員中授業に差閊なき者は隨時停車場に出でゝ送迎し軍國民としての熱誠を捧ぐるに努めたり尚ほ最終日二日間は校庭の堤防上に生徒一同大旗を振りつゝ通過の汽車に對し万歳を浴せ盛なる送迎の意を表せり

◎前期試驗、さしも炎威を逞うせし夏日も何時しか暮れて秋涼郊墟に入り燈火稍々親しむべき候となりて我校はこゝに前期試驗に入らんとす日程左の如し

九月十八日開始、同廿六日終了

◎宮田助手榮轉、昨年十一月以來本校林業助手及教授嘱託として熱心校務に從事せられし宮田助手は今回更級郡技手に榮轉することゝなりしを以て十六日講堂に於て告別式を行ひ仝日午後六時の滝車にて赴任地に向へり願ふに本校卒業生にして本校内に郡林業技手たるもの現に三名あり今回の宮田技手を加へて四名となる譯なり其任や重且つ大切に翼はくは我が林業の爲め又我校聲譽の爲自重自愛せられん事を

校友會辯論例會より

芙蓉咲き、桔梗咲き、女郎花咲きて夏漸く深くつひに殘暑を如何にせむの新秋朝夕に蜩聲多き葉月の末つ方、二十九日午前八時より、辯論部創始第一次の例會を催す、うの辯士及その演題左の如し

△開會の辞　田邊部長――本部の獨立と俱に盛大を致すべき希望縷述

△讀書の樂　二年、千村彌之助君――要するに讀書は時と處とを問はざる君子の樂にして吾らの尊重すべきものとの論、簡單にして要を得たり、雄辯とは長廣舌に限らず君の如きも、既にうの一角に到達せりと謂つべし

△簡易生活　三年、安藤晃君――君の聲咳を擅上に披瀝せしは今回が始めて也、何しろ美聲專賣を以て任ずる君故、音吐の朗々は御手の物、論旨は稍亂れしも要は複雜社會の念を去れとの事。

△大和の十津川　一年、岩田元吉君――大塔宮の熊野落ありし十津川十余里の險を說き、風俗民情の視察譚、兎に角實地の論評故傾聽に値せり、一年級有數の辯士向後の發展を希望す

△經濟に就て　三年、今井眞二君――校中稀有の經濟通たる君が一度壇上に大は國家より小は寄宿舍炊事、貧書生空財布の底のはたき加減に到るまで餘蘊なく說破したる舌端正に爛らんとするばかり、殊に諸統計を示したるは熱心、演說には少くともこれ程の用意あるべきなり、他日本校が一選擧區となるあらば代議士としては先づそれ君乎

△休暇中雜觀　三年、種倉隨藏君――これは又校中唯一のハラドックス演說家なれば聽者をチャームすること夥し、害本武藏の精神術について試合の要領を說き並故郷の水害地見物談を述べたり、態度は實に言

態一致にして講釋師跳足なり、本日の辯士中最も多く水を召上れり其數四杯半、眉尻をキリツと上げ、上体を特にツンと反らすは君が終止格を述ぶる際の特徴、聽衆中これに引かれてビクつかするものあり、この一事を以て君が人氣演說家たるを知れこれ或は君が說く請神術の一端たるやも計り知れず矣

△自ら助くる人　一年、吉川光夫君――君は少し呼吸孔の工合を害せるが如し息つく毎の一瞬に高聲あり、これ寶珠の微瑕のみ說く處は古今東西の偉人が自助せる迹の赫耀たるにあり、少壯論客られ自愛せよ

△滿州守備陣中談　招待員、桑名中尉殿

新版圖とも謂つべき滿州の野にある我守備軍の生活と勤務の狀態並にうの奇談三四あり、亡國の民の憐れむべきこと、外交と軍備等のことゝもいと興趣ある話なりき兎角軍人の談論は平易明快にして軍國の我らには最もよく迎へらるゝものゝ一也

△偉人に就て　三年、等々力官一君――時代が偉人を生むか、偉人が時代を形成するかの二問を拉し來つて解剖論評し結論を與へ、偉人崇拜に就て論ト最後に吾人も亦偉人たるべき素質と共通性を存することを大呼しぬ、君も久しく說を蓄へ一時に發露せしめたり、君が議論家たること定評あり焉にて論旨の整然たる、更に次回の快辯を要望す、好漢フレー！

△避暑は誰が始めたか　三年、長崎千萬一君――支那人か冬日を愛し夏日を厭ふ所以を前提とし東西古今の史に徵して冷熱の人を强弱ならしめ避暑をなす如き人種は亡滅に近きを痛罵す時に『該博々々』の聲あり重大の軀幹を持して動せず結論せしところ流石に君の辯や儕輩を凌駕するの慨ありき但所々流暢に失して失言逆語ありしは愛嬌とも云べく又一失とも云ふべし

△故郷の偉人　三年、小崎次郎君――佐久間象山が世界的の偉材にして郷土の誇りなることうの生立を述べたり、半ば年譜を讀むに似たるは惜しき事の一つ

△マヂ――　二年、加茂憲太郎君――五尺の男子を瞰下すること六寸七分の長軀をズラリと竄し、拜金者と大智者との極端を批難せり、されど七分はマヂ一派に肩を持ちたるかの觀あり、浮世の萬事皆これマヂ一の一去一來にあり、人生五十年豈苦思多くして畢らんやの論なりき、吾輩『金は天下のあばれ者』の歌なくんば非ず

△見にざるアルプス　三年、吉川眞夫君――小兵なれども眼鏡あり、いかで退けをばとるべきやは辯才あり、とは吾輩が壇上の君を見し感、幸に的中、說く處は大奈翁がアルプス越の軍物語と勇氣斷行の說、修辞の艶麗なるはよし、滿面に笑をもつて高呼する亦よし、惜しい哉抑揚、度に過ぎ折角金の双言片句聽取に苦しむ、謂勿れ惜しい哉と軍物語に波瀾を思はしむるは抑揚と態度にあるを君の演說は過古の練習に俟つこと多大更に向上を希む

△機會我觀　三年、都竹武次郎君――斯く申す吾輩自身也『くん』を附したるは吾輩自身を客觀したるのみ、諒とせられよ、彼が說くところ極めて杜撰、彼自身は『機會とは時代てふ大弦に吾人身心の充實と緊張の琴線が觸接して發する共鳴なることと、今世が萬世の一過とも云ふべき時機なると』を述べし積り也、彼數日來少しく變調子、何を言ひしやら今に不覺、聽者如何！

△刻下の大勢　招待員、乾　郡長殿――態度頗る謹嚴徐ろに口を開いて、世界刻下の大勢上、吾邦が一等國として　價値につき列國と國民力上、兵力上、富力上、版圖上、教育上、風紀上、保安上等各方面より精細なる數の比較を以て大に國家發展上國民的覺醒を促されぬ、由來數に關する述說は無味多きなるに流石雄辯の氏なれば引例註釋極めて奇警、一言一句精彩あり靜聽の裡に談を終られしは蓋し絶抜なり

△偶感　二年、拓植五郎君――人生五十年天地の悠久に比し須臾なるを說く處蘇子の感懷より得來るかと吾輩は思ひぬ、態度回を重ねて漸く成る――この時歡聲多く聽取最も苦しかりき！

△口と手　二年、坂本光太郎君――志士的態度と熱烈なる口吻は大に可、言行一致

はそれ難へ哉と說く、前來辯士中君が舌鋒の槍玉に擧げられしものあるが如く見受く。言行の一致は聖人も尙苦しむところ、余輩は現今の靑年がやゝ口を過重するを思へども、敢てこれを沮止批難の要を思はず。君よ煩雜と小心とを避け大に抱負を吐け

△富士雜觀　三年、田近善右衞門君――君が今夏の登山談なりの顚末、スキー隊遭難の回顧、砂走りの壯快等を得意の快辯もて說き、最後に修養上富士と向上、人格、國体等につき觀察を下せし有趣の論なりき東方に精氣の粹然鐘りしものこれ不二の神山、登るもの多少の感なき能はず。君が觀察眼もて何物をか洞察せざる。この人にしてこの造詣深き說あり、態度音調漸く室に入れりと遙に觀測せられぬ

△閉會の辭　安藤會長―本日の朝鮮併合を紀念すべき佳日に當り、盛大なる斯會を催し得たるを滿足し、且時局に關し愼重の態度あるべきを簡單に述べられぬ

△萬歲の三唱　會長の發聲にて總員起立帝國の萬歲を三たび呼號すさしもの講堂爲に搖ぎ震ひぬ、時に午後四時半、戶外の蕭雨やうやく烈し、雨聲多ければ秋思秋景を宜傳すべき蜩の聲聞くべくもあらず

鑑記安評辯士諸君の卓說を瀆せし罪多謝々々　八月卅日　翠村生

校友消息

◎廣瀨靜之進君は明治四十一年以來巖手縣に奉職せられしが今回鐵道院に轉官靑森保線事務所在勤を命ぜられ九月一日着任の旨會長宛通知ありたり

◎古畑七三君は廣島縣三原小林區廢止の結果西條小林區署に轉任

◎中垣英一君は栃木縣那須郡太田原町小林區署へ轉任

◎豫て東京帝室林野管理局に於て林野講習を受け居りし左の諸氏は七月中同講習を終へ今固夫々就職することゝなれるが其赴任地左の如し

原　耕民君　帝室林野管理局木曾支局
杉本一直君　同　上
酒井光義君　同　上　京都事務所
市岡新八君　同　上　甲府出張所
梅田吉郎君　同　上　大磯出張所
赤羽　高君　同　上　札幌支局
石坂季治君　同　上　名古屋支局

◎本校前教諭小松吉次郎先生は今夏暑中休暇を利用して滿韓地方に修學旅行を企て林業其他に關し研究を遂げ豐富なる材料を齎し歸れる由記者の許へ通信ありたり何れ記行文を乞ひて本誌上に紹介すべし

◎前教諭高木本校先生は退職後暫く鄕里松本に靜養せられ居りしが去る六月中南安大野川小學校へ招聘せられし由同所は信州の別天地、米の生る木も知らぬといふ僻鄕白骨溫泉へ二里强、道は險惡奇動を極め宛然豐後の耶馬溪に似たり若し夫れ節を曳かんとする士もあらば東道の任を辭せず云々と近信ありたり

◎松田前校長の歸臥、前校長にして本會名譽會員たる松田力熊先生は明治四十年七月木曾支廳に轉せられしより今日に至る迄次席技師として勤務せられしが今回退職となり近々故山に歸臥せらるゝ事となりしを以て八月廿四日本校職員卒業生及び有志の一團は三河屋に於て送別會を催し席上安藤校長の送別の辭に次で松田師の挨拶あり其他卒業生を代表して宮下信一氏の送辭、安井正夫氏の送別、和歌の朗詠等あり會者五十名中卒業生は二十餘名の多きに達す、八月廿六日には松田師態々出校され校友に告別の辭を述べられたり之に對して安藤校長は會員を代表して松田師の本校に於ける功績並に支廳在職中特に本校卒業生の就職其他に關し深甚の同情を以て盡力斡旋せられし事等を述べて感謝の意を表せり、越ねて八月卅一日松田師は京都に向け出發せるが見送人は本校職員卒業生を始めとして町民其他多數にて盛大なりき因に松田師は當分京都に滯留せらるゝ事別項廣告の如し

◎最近母校訪問の卒業生左の如し

古畑金藏君、宇佐美周紫君、加藤清一君

原耕民君、酒井光義君、

◎嶋田勘四郎君よりの八月通信に曰く『前略秋田地方は目下日中八十八度內外にて小生出張地は人里離れたる三里餘の山中鬱々たる杉林中に候へば日中とても八十二三度にて誠に暮しよき土地に美杉九太二萬五千石餘の伐木造材事業に從事致居候云々

◎古畑七三君よりの九月通信に曰く『前署當署も合併の結果管內國有林面積一萬有數百町歩を算し外業內務頗る繁忙を極むる事と相成申候爾後は益奮勵努力一は以て諸先生の御高恩の萬分に報ひ一は以て大に吾校眞價の發揚に努むる覺悟に御座候云々』

文苑

趣味の道

三年　信天翁

C君　僕はこんな事を考へた、それは眞實な正しい事柄であると信じたから此處で君に打明ける不徹底ながら。

しかし君と僕とは常に意見が合はぬ性質だからこのことも或は間違つた考だと君はとるかも知れない。若し間違つて居ると思つたなら君の此れに對する意見を僕に聞かして呉れ。しかし蔭ながらの誹謗や嘲笑は御免だよ。

C君　趣味を抔げない生活。趣味の道を外れない生活之れか最も美しい人間の生活であると僕は思ふ。

趣味の道、それは神が吾人に與へてくれた道である。神が『この道を辿れよかし』と吾人に示してくれた道である。だから趣味の道は貴い、趣味の道は神聖である。

趣味の道それを辿るのが人生の自然である人生當然の行路である、本性を僞らない人間、神の命示に背かない人間、その人間は如何に貴いであらう。

この尊い美しい人間の履んだ跡――その生活――はどんなにか美しく床しくあるであらう。

C君　世の人は果敢ないものである。慾望と境遇とに制せられてこの美しい趣味の道を捨てゝ本性を僞つた、神命に背いた道を辿つてしまふ

虛僞の道、背戾の道それを辿るものには何等の趣味もない爲めから不快の念が絕ねず付き纏ふ。さうして無意味なライフを作つてしまふ。

世の人が自己の職業に飽き自己の現在を呪ふのは多くはこの趣味の道を外れて虛僞背戾の道を辿つたからである。

C君　自分の意志は素より薄弱だ。けれども自分は生活難や、他人の强制や誘惑や、その他のあらゆる障礙を排して趣味の光明に向つて進む心算だ、そうして貧弱ながら美しいライフを形成らうと思ふ。

C君　君はどう思ふかね――完――

校歌ありて實習の歌なきを慨する者あり因て試に演習林の歌を作る　（竹軒生）

演習林の歌

一

綠樹の陰のはてもなく
空翠凝りて雨となる
御料の山の山つゞき
演習林は茫々と
峯を遮り尾をわたる
こゝら吾等が試練の地。

二

靑帝賀する春四月
殘の雪をふみわけて
巖を浚ぎ谷に入り
繁るおどろを刈り拂ひ
幾千の苗を植うるべく
日毎に揮ふ斧と鍬。

三

炎陽赫とかゞやきて
立つや奇しき雲の峯
風死し土も燒くる時
照る日の下に草刈れば
流るゝ汗は玉をなし
地に滴りて響あり。

四

霜露はにちて木ノ葉染み
鴻雁天をわたる時
鐵と鍛へしまさらをが
腕の力ためすべく

館にひとく伐木の音もせはしく聞ゆなり。

五

夫れ全力を盡したる勞働の後愉樂あり渾身の汗絞りてぶ清風五斗の味あり

この樂さこの樂さ千金の子はしも知らじ。

六

谷間の清水手に掬ぶさ百合の花の香をかぎてしばし假寐の宿かれば夢魂すゞしく風清く王者も知らぬ樂しさのわが胸中に溢るなり

七

夕陽、西に沈みゆき玉兎、東にをどる時一日の樂をなしはてゝ飢獸を高く唱ふれば見よ雲霧は跡かねて山靈高くほゝえむを

八

かくて春去り秋ゆきて幾星霜の時の經吾等がこめし眞心の跡はさやかに現はれて世にたゞひなき學林の名譽は月に輝かむ

和歌

最も親愛なる松田先生の御別にのぞみて

安井正、夫

交りの重なるまゝにまごころのまことに見れてなつかしき君

大社まうでなかちに導れゆき君さくむ日を今まりがまつ

出征軍人のいさを勇ましく戰地へ向ひけるを停車場に見送りて

ものゝふのかすにはあらぬ老が身も矢竹ごゝろにはやる今日哉

二年 加藤由緣

油蟬じむと早や暗く日に幾けて七月なれば小木曾の山も

萬人のかよふ大路にらんぷ屋は車を曳きぬあやふき寶

曾蚊帳に蚊遣りの煙ごゝちよき故郷こひし夏さしなれば

時鳥わかき樵夫は聞きほれて小木曾の山に手斧おとしぬ

われよ我か細り腕を夏の太陽にふりかざしつつ草刈る男

我すこし眞擊を秋かむわれ少しりちぎ者よといはるが哀し

蜩の啼く夕暮の窓にしてうすほの白き紫陽花を見る

一千村彌之助君の宅にて

濁りたる眞夏の雨のみづげぶり市を鳴らしてしばしに去れり

安井書記退職慰勞金申込報告

金五拾錢 島田雄太郎君
金壹圓 松澤莊太郎君
金五拾錢 岡西謙三君
金壹圓 羅口勇君
小計參圓
累計參拾貳圓九拾五錢

林教諭退職慰勞金申込報告

金五拾錢 松澤莊太郎君
金五拾錢 岡西謙三君
金五拾錢 征矢野餘所夫君
金壹圓 島田雄太郎君
金壹圓 小羽根安治君
小計參圓五拾錢
累計五拾壹圓參拾五錢

川崎助手退職慰勞金申込報告

金五拾錢 岡西謙三君
累計拾圓六拾錢

雜誌費領收報告

金五十錢 加藤正次君
金壹圓 加藤清一君
金壹圓 森巖君

林有諸君に謹告

小生儀

多年當地に奉職罷在候處今般退官致候に付此段林有諸君に謹告致候也

追而當分京都市寺町通廣小路上ル澤方に滯在本年十一月歸鄉の筈に有之候爲念右申添候以上

大正三年八月 松田力熊

卒業生諸君に謹告

拜啓來る十月八日(雨天順延)本校々庭に於て第十四回運動會擧行致候に付奮て御來會被下度此段御案内申上候也

大正三年九月 木曾山林學校々有會

長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地
編纂兼發行人 安井正夫
長野市南縣町已三番地
印刷者 田中彌助
長野市西后町乙二十一番地
印刷所 長野新聞社活版部
長野縣西筑摩郡福島町二八九番地
發行所 鷹鼎書店